

平成22年(2010年)9月17日 (金曜日)

若い芸術家を支援

熱海工務
クラーク
アート
工房

インターンシップ実習授業 芸大院生が壁画制作

熱海市泉のクラークアート工房(滝久雄代表)で、東京芸術大学大学院の学生たちが壁画制作の実習に取り組んでいる。美術研究科壁画

研究室の学生9人が、スタッフの指導を受けながらステンドグラスと陶板の制作工程の一部に携わっている。同工房は、1981年



陶板レリーフの試作に取り組む学生たち
=泉の「クラークアート熱海ゆがわら工房」

に開設されステンドグラスや陶板を中心としたパブリックアート(公共空間)に展示される芸術作品の制作を行っている。これまでに制作した作品は460点におよび、それらは首都圏の鉄道駅を中心に全国各地に設置されている。「クラークアート」はラテン語で「創造」を意味する。

今回の実習は、同工房が東京芸大とともに進める「インターンシップ実習授業」の試験的な取り組みとして実施された。5日間コースと3日間コースが用意された。学生たちは「パブリックアートとしての壁画表現」「パブリックアートマネジメントの実践」などについて講義を受けた後、制作実習に取り組んだ。

実習では、宮城県内の公共施設に設置されるステンドグラスと愛知県内の大学に設置される陶板の制作の一部を手伝った。ステンドグラスでは、ガラスのカットと仮組を担当した。陶板では、10分の1サイズの模型作りと作品の1部を原寸大で制作することに取り組んだ。

陶板を担当した寺園大誠さんは「原画を描いた作家のイメージをどう表現するのが難しい。ふだんできない体験ができてよかった」、同じく陶板に取り組んだ佐藤香さんは「実習を通して社会とのつながりを意識することができた。芸術を仕事にすることの大変さが少し分かった」などと感想を話した。

同工房は将来、東京芸大との協働で「インターンシップ実習授業」を正式に実施したいと考えている。同工房アートディレクターの中野竜志さんは「若い芸術家たちを支援したいという思いとともに、学生たちの柔軟な

発想を参考にさせてほしいという気持ちもある。まだマイナーなパブリックアートという分野を広く知ってもらうためにも、インターンシップ実習は有効だと思う」と話した。

同工房と東京芸大のこの取り組みを地元も応援している。その一環として泉や神奈川県湯河原町の旅館が、学生たちを招いて温泉入浴を楽しんでもらった。実習最終日の17日には、行政や観光関係者らとの意見交換会も予定されている。